

## 論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号

※ 甲 第

号

氏 名

城田 純平

論 文 題 目

前期ハイデガーにおける生の哲学

論文審査担当者

主査 名古屋大学教授 宮原 勇

委員 名古屋大学教授 田村 均

委員 名古屋大学教授 金山 弥平

委員 名古屋大学准教授 吉武 純夫

## 論文審査の結果の要旨

### 【本論文の概要】

ハイデガーの初期フライブルク期において、人間存在を指示する用語として用いられていた「生」(Leben)なる用語が、『存在と時間』の時期には、当時としては極めて奇妙な表現である「現存在」(Dasein)に取って代わられるが、本論文は、「生」概念の使用がなぜ取り止められたかを明らかにすることで、『存在と時間』での現存在の実存論的分析論の課題が当時の「生の哲学」とどう違うかを解明しようとしたものである。

第一章と第二章では、初期フライブルク期から『存在と時間』の時期に至るまでのハイデガーの諸テクストを年代順に分析し、「現存在」が「生」に取って代わる過程を両概念の内実に着目して考察し、生と現存在の両概念を一貫して規定し、しかも『存在と時間』に於いては現存在の「本質」として取り出された「慮り」(Sorge)の概念を詳しく分析することにより、生と現存在がその内実において根本的な連続性を有していることが明らかになる。

第三章から第五章に於いては、「生」なる用語の使用を取りやめた理由として、先行研究の検討を通じて二つのテーゼを提示し、それらを申請者独自の視点で検証している。一つは、ハイデガーは、人間を ζῶον λόγον ἔχον とする古代ギリシア以来の人間観への批判によって、ζωή の含意をもつ「生」の使用を取り止めたというものである (テーゼ A)。他の一つは、ハイデガー自身の中でのディルタイの「生の哲学」に対する批判の高まりによって「生」なる用語の使用を中止したというものである (テーゼ B)。まず、テーゼ A について、伝統的な人間理解の発想を踏襲しているシェーラーの哲学的人間学に対するハイデガーの関わりが論じられ、テーゼ B について、『存在と時間』における二つのディルタイ論を軸に検討され、「生」概念から「現存在」への転換が図られた意図を明確に提示している。

第六章では、『存在と時間』における死の実存論的分析が詳細に検討される。ハイデガーが積極的に問題としている「死へ臨む存在」、つまり彼独特のニュアンスを持つ「死亡すること (Sterben)」の諸契機が具体的に示される。そこでの議論を通して、「生」の使用がハイデガーによって取り止められた理由は、ハイデガー自身が積極的に使用していた βίος の意味での生の概念的な内実に関わるものではなく、むしろ、ζωή を前提にして人間を構想するシェーラーらの哲学的人間学に対する批判や、その本来的な傾向の不徹底さのゆえに βίος の存在への問いに至らなかったディルタイに対する批判に求められる。ただし現存在の「本来性」の分析においては βίος 概念では汲み尽せない事柄が問題にされており、いわばそこでは「生の哲学」の乗り越えが図られている。それゆえ、初期フライブルク期の βίος は、「本来性」における現存在ではなく、むしろ「日常性」における現存在へとつながっていたということを明らかにしている。

## 論文審査の結果の要旨

### 【本論文の評価】

本論文は、ハイデガーの主著『存在と時間』(1927年刊行)での中心的概念である「現存在」の使用の理由を、それに先行する20年代の彼の講義録等を綿密に読み解くことにより明らかにした研究であり、適切な先行文献の渉猟、用語に関する詳細な文法的考究、そしてハイデガーの同時代の哲学的人間学との対比といった点で大変優れた研究であり、論文全体に貫かれている ζωή と βίος の対立から *Leben* をみるという視点も独創的なものである。また、個別的な点での評価としては下記の点が挙げられよう。

まず、1921/22年冬学期の講義『アリストテレスの現象学的解釈』、1922年『ナトルプ報告』、1923年夏学期の講義『存在論(事実性の解釈学)』における「生」と「現存在」という用語の使用に関する〈揺れ〉を丹念に辿り、その中で、「世界」概念にまつわり、ハイデガー哲学の根本的洞察である「存在論的差異」の成立以前の表現を発見するなど貴重な指摘がなされている点など、鋭い分析は高く評価される。

また、これも『存在と時間』における、ある意味では「謎」のひとつになっている *Sorge* 概念の登場に関して、「自己配慮」、あるいは「自己への慮り」なる表現の消失の解釈から、現存在のあり方自体を特徴付けるという読み込みも説得力あるものとなっている。

そして、「生」から「現存在」への転換というハイデガー哲学そのものの成立の問題を ζωή としての「生」の批判から βίος への移行が、*Sorge* をその本質とする「現存在」という規定となったことを極めて明確に論証している点は高く評価できる。

また、ハイデガー研究でしばしば問題となってきた、ディルタイとヨルク伯に対するハイデガーの係わりの問題も、本論文の後半部分で論じられていて、申請者の見解では、その問題は二者択一的なものではなく、ハイデガーとヨルク伯は、「歴史的なもの」ということで「実存的スタンス」を共有していたとしても、それは「ヨルクを媒介にしてディルタイにおける積極的な点を引き出すためのもの」と解釈するが、この点は、従来の説を修正する試みで注目し得る。

以上のように、本論文には初期ハイデガーを解釈する上で重要な概念に関して説得力ある見解が見出されるが、若干の疑念も生じないわけではない。例えば、ハイデガーは、「現-存在」(*das Seyn des Da*)の *des* を〈目的語としての属格〉として使用し、*Sein* に他動詞的意味合いを込めているとの箇所では、説明が不十分であり、また *Sein* の他動詞的表現として「世界現存在を存在する」(*Weltdasein-Sein*)[1923年の表現]の解釈の妥当性も疑問として残るが、この点は論文全体の価値を損なう程の瑕疵ではないと判断される。以上により、審査委員は全員一致して、本論文が博士(文学)の学位を与えるのにふさわしいものと判断した。